総務経済委員会行政視察報告

視察第２日　山口県長門市　令和８年５月１４日（木）

視察先・視察項目

山口県長門市

「長門湯本温泉観光まちづくり計画について」

【長門市の概要】

本州の最西北端、山口県の西北部に位置する長門市。東は萩市、南は下関市、美祢市に接し、北側には北長門海岸国定公園に指定される美しい日本海の風景が広がっている。この土地が長門国大津郡として成立したのは、大化改新により国郡里制が構築された７世紀後半といわれている。江戸時代には長州藩下で前大津と先大津に分けられ、明治に入ると大小区制により区分され、その後、郡制復活や市制・町村制施行、昭和の大合併などの編制を繰り返し、旧長門市、大津郡三隅町・日置町・油谷町となり、その１市３町が平成 17 年 3 月 22 日に合併し、長門市としてスタートする。

日本海沿岸一帯の豊かな漁場では、古くから捕鯨や漁業が盛んに行われ、多くの漁港が点在している。北長門海岸国定公園に指定される海岸線では、日本海の荒波に浸食された岩と白い砂浜が出入りし、変化に富んだ雄大な自然景観を生み出している。中でも紺碧の海上に奇岩怪石が連なる海上アルプス「青海島」、遥か日本海を展望できる「千畳敷」、海に浮かぶ「棚田」のシルエット、本州最西北端に突き出した「川尻岬」の緑青色の海などは、訪れる人々を魅了している。

また、長門市は温泉に恵まれ、風情も効能も異なる５つの温泉郷があり、清流にホタルが舞いカジカの声が響く「湯本温泉」、山間の湯治場「俵山温泉」、長閑に効能を楽しむ「湯免温泉」、美しい海を臨む「黄波戸温泉」や「油谷湾温泉」があり、多くの人が訪れている。一方、いのちと心を大切にした童謡詩人「金子みすゞ」、シベリヤ・シリーズで知られる画家「香月泰男」、長門出生伝承の残る劇作家「近松門左衛門」といった人たちの存在は、長門の文化を深く魅力あるものにしてくれます。歴史の舞台では大内氏終焉の地として語り継がれ、楊貴妃伝説など浪漫溢れる物語も数多くあり、長門市ではこうした豊かな大自然とこ

れまで築かれてきた歴史や文化を融合したまちづくりを進めながら、その力は『風』となり、市民活動の原動力として流れている。

人口と面積

○人　口：２９，３０３人　１５，２３０世帯（集計基準日：令和８年４月３０日）
○面　積：３５７．３１Ｋ㎡

１視察目的

長門湯本温泉観光まちづくり計画では、「全国温泉地ランキング TOP１０」入りを目標に、魅力的な温泉街を生み出す６つの要素を戦略的に表現し、統一感のある開発や持続可能な観光地経営につなげていくため、各分野の専門家で構成する推進体制を構築し事業推進を図っており、本市における湯谷温泉活性化につなげることを目的とし長門市に伺う。

２視察内容

長門湯本温泉再生に向けた取組

（１）まちづくりの経緯

長門湯本温泉は県内で最も古い歴史を持つ温泉であるが、宿泊者数が昭和５９年の約３９万をピークに３０年間下降をたどり、平成２６年の老舗旅館の廃業を機に、温泉街の中心に遊休地が広がる苦しい状況となる。その状況にまちの将来の危機感を感じた市は、廃業した旅館が所有していた土地 13,200 ㎡を市が取得し、建物の解体・撤去を進め跡地利用に入る。その後、長門市の働きかけにより、星野リゾートとの誘致・進出協定を締結し、官民連携による、温泉街再生に向けたマスタープランを策定する。

（２）長門湯本温泉観光まちづくり計画

令和２年に策定された長門湯本温泉街づくり計画において、当時にっぽんの温泉１００選において８６位だった長門湯本温泉を「全国温泉地ランキング TOP１０」に向けた戦略として、自然を生かした魅力的な温泉街を持つ温泉地を目指し、その上で魅力的な温泉街に必要な６つの要素「風呂（外湯）」「食べ歩き」「文化体験」「そぞろ歩き（回遊性）」「絵になる場所」「休む・佇む空間」を、長門湯本の地形や観光資源などで表現し、土地の魅力を最大限生かしながらリノベーションを進める計画となっている。

（３）長門湯本温泉観光まちづくり計画推進の財源

ハード・ソフト事業は、国の補助事業などを最大現活用
・国土交通省景観まちづくり刷新支援事（補助率１/２）
・内閣府地方創生推進交付金（補助率１/２）
長門市事業費（平成２８年度～令和２年度）　約２３．４億円
※県事業費による飛び石など河川整備事業も充当

（４）民間投資による新規事業

民間投資による新規事業として、現在まで３件の旅館リノベーションが図られ、空き家等のリノベーションとして飲食店６軒、ビール工房１軒、土産物店１軒、シェアハウス１軒、レンタサイクル１軒など１０軒以上の民間投資がされている。

（５）地域主体による持続的なまちづくり

エリアマネジメント事業として持続的な観光まちづくりを進める仕組みとして、事業を担う民間のエリアマネジメント法人を設立し、法人が将来へ向けた温泉街への取組へむけたビジョン・計画進捗を担いながら、整備の財源を令和２年４月からの入湯税引上げ分（１５０円）を長門湯本温泉振興基金として財源を確保し観光客の満足度を高める事業に充当している。また、エリアマネジメントに関する官民での評価・合意の仕組みとして、エリアマネジメント法人、長門市、外部評価委員会の３者による、ビジョン、事業計画の共有を図っている。

３所感

長門市における長門湯本温泉活性化、そして今日の再生への道のりにおいての第１歩は、やはり市の決断と選択であると考える。もちろん全国の自治体にある多くの温泉街は観光客数の目減りに伴い疲弊しており、各自治体様々取組が行われている。そうした中、長門市においては歴史ある老舗ホテルの廃業がきっかけで、市が危機感を持ったことがターニングポイントであろう。その時に今後の温泉街そしてまちの観光におけるまちづくりをどうしていくというビジョンを明確にし、市が老舗ホテルの土地を取得した決断は慧眼であり、再生プロジェクトが成功した最も大きな理由であると考える。その後、星野リゾートとの粘り強い交渉を経て誘致に至り、官民連携で温泉街再生に向けた取組を進め現在に至っている。そこで注視したい点として、長門市の民間主導で観光まちづくりを推進する仕組みは、将来の行政の都合でぶれが生じないよう、持続性を考慮した独自性も評価に値する。本市においても、民間主導の理念を貫き、ハード整備が独走するかたちに陥らないよう、ソフト事業の担い手である地域の民間事業者、市民を主役として位置づけ、湯谷温泉街活性化基本構想実現に向け取り組んでいく必要がある。

『長門市グループ』

長田共永・浅尾洋平・古瀬剛